

このような決意はもちろん、さらに終始一貫せる献身が必要である。中途半端な方法や、あるいはぐずぐずしているだけでは、最後の精神力まで緊張させて初めて遂行できると思われるような課題に、近づくことはできない。そのときにはまた、ドイツ帝国の全政治的支配が、この唯一の目的に向かつて熱申しなければならなかった。こうした課題や条件を認識する以外に、他の考慮に導かれる方策は決して生じえなかつた、この目的は闘争によってのみ達せられる、ということを明白に認識させ、しかしまた冷静に、沈着に戦闘にたち向かわねばならなかつたのだ。

親英反露

そこで同盟はすべてもっぱらこの観点から検討し、その利用しうる度合いにしたがって評価すべきであつた。人々がヨーロッパで土地と領土を欲するならば、そのさいは大体においてロシアの犠牲でのみ行なわれえた。そのばあいには、ドイツの鋤には耕地を、だが国民には日々のパンを与えるために、ドイツの剣でもって、新しいドイツ帝国はふたたび昔のドイツ騎士団の騎士の道を進まねばならなかつたのだ。

かかる政策のためには、もちろんヨーロッパにはただ一つの同盟国があつた。すなわちイギリスである。

イギリスと結んでのみ、背面を保護されて、新しいゲルマンの行軍を始めることができたのである。なおまたその権利は、われわれの祖先の権利よりも決して小さくはないであろう。わが平和主義者といえども、たとい最初の鋤といったものがかつては「剣」と呼ばれたとしても、東方のパンをたべたることを拒みはしない。

東方のパン (Brot)

イギリスの好意を得るためには、たがとんな犠牲でも大きすぎることがあつてはならなかつた。植民地と海上勢力を断念し、そしてイギリス工業に対して競争をさしひかえるべきであつた。

絶対的に明白な態度だけが、このような目的に達することができたのだ。すなわち、世界政界と植民地を放棄すること、ドイツ海軍を断念すること。陸軍に対して国家の全勢力機能を集中することである。

その結果はたしかに一時的には抑制であつたかも知れない。だが偉大なそして力強い未来でもあつた。

この意味でイギリスがわかりがよかつたならば、その時期があつたのだ。ドイツが自国の人口増加のために何かある打開策を探さねばならず、そしてイギリスと結んでそれをヨーロッパに求めるか、あるいはイギリスと結ばずに世界に求めるかを、イギリス人は非常によく理解していたのだからである。

世紀の転換期に、ロンドン自身のほうからドイツに接近しようとした時があつたが、この考えはなによりもまずイギリスが先にのべたようであつたからである。最近の数年間にわれわれがほんとうに恐ろしく思つて観察することができたことが、当時初めて現われたのであつた。人々はイギリスのために火中の栗を拾わねばならないという考えから、いやな感じを受けた。あたかも同盟とは一般に相互取引の原則とは異なつた原則でありうるかのようであつた。しかしこういう取引は、イギリスとは非常にうまくできたのである。イギリス外交はいつも相互履行なくしては、何もしてくることを期待できないといふことを知らないほど、バ力ではなかつたのである。

そして、賢明なドイツ外交が一九〇四年の日本の役割を引受けていたと考えてみよう。そうすればその結果がどれほどドイツのためになったか計り知れないのである。

決して「世界戦争」にまでいたらなかったに違いない。
一九〇四年の血は、一九一四年から一九一八年にかけて流した血を十倍も節約したのだ。そうすればドイツは、今日世界でどんな地位を占めていたことだろう！

対オーストリア同盟の廃止　もちろんこのばあいオーストリアとの同盟は、無意味であった。というのはこの国家的なミイラは、戦争を貫徹するためにドイツと結んだのではなく、永久の平和を維持するために結んだのであり、さらに平和は、りこうにも徐々にだが確実に、王国内のドイツ主義を絶滅するために用いることができたからだ。

しかしこの同盟は次の理由からも不可能であった。すなわち、直接に国境を接しているところで行なわれている非ドイツ化の過程に終末をもたらすだけの力と決意を一度ももったことのない国からは、ドイツの国家的利益を積極的に代表することなどまったく期待できないからである。ドイツが、頼りにならないハーブスブルク国家から一千万の同胞種族の運命についての処置を奪いとるだけの国家感情と無遠慮さをもたないならば、その場合には先を見通した思いきった計画にいつか手を出さるうなどは、まったく期待することができなかった。オーストリア問題に対する旧ドイツ帝国の態度は、全国民の運命を決する闘争における行動の試金石だったのである。いずれにせよ、オーストリアの同盟の能力の価値は、もっぱらドイツ的要素の維持ということ

から決められたのであるから、年々歳々ドイツ主義がますます抑圧されるのを傍観してはならなかった。

しかしいっこうにこの方法はとられなかった。

人々はなによりも戦闘を恐れた。それにもかかわらずついに最も不利なときに、戦争にまきこまれたのであった。

人々は運命からいそいで逃げようとした。そして運命にすぐに追いつかれたのだ。世界平和の維持を夢見て、世界戦争に達したのだ。

そしてこれが、なぜドイツの未来を形成するという第三の道にかつて一度も注目しなかったか、という最も重要な理由であった。新領土の獲得はただ東方においてのみ達せられることは知っていたが、それには戦争が必要だと考え、いかなる代価を払っても平和を欲したのだ。というのは、ドイツ外交のスローガンは、とっくの昔に、どんな方法を用いてもドイツ国民を維持するというのではなく、むしろあらゆる手段をつくして、世界平和を維持するのだ、と称していたからだ。そしてこれがどんな成果をおさめたかは、よく知られている。わたしはこの点について後に特に触れるつもりである。

経済拡張政策　かくして第四の可能性が残された。工業と世界貿易、海軍と植民地がそれである。

もちろんこのような発展は、始めは比較的容易に、そしてまた恐らく迅速に達成されるもので



角川文庫

—3143—

完訳 わが闘争

(上)

アドルフ・ヒトラー
平野一郎 訳
将積茂



角川書店

